″人の中″街″が布教先″私の生き甲斐

奈良教会
伊藤昌代さん（55）

奈良教会のお母さん、と言われている。山形からここへ移ってきた時には、法座所もなかった。そうした中で、「ご法を共に語り合える友だちが欲しい、心を打ち明け合える同信の仲間が欲しい」と、無垢（く）な気持でお導きに努めた。隣近所はもちろん、電車、バスで隣り合わせた人にも話しかけ、氏名、住所を聞き、訪ねて行ってはご法を説いた。悪態をつかれたこともある。塩をまかれたこともある。それでも伊藤さんはお導きを生きがいとし、楽しみとし、慈悲の布教に精進した。しかし、八年前、二女を予防接種の事故が原因の肉腫で、失った。その悲しみと共に、「信仰している人でも娘を早死にさせる」という周囲の言葉が、伊藤さんを悩乱させた。そしてスランプ。しかし、そのスランプの中でもお導きをやめることができなかった。やがて、新教会設立のため赴任してきた新しい幹部さんのご指導に触れ、悲しみの母は立ち直っていく。過去の執着から解放されたこの人のご法活動は、瞠（どう）目に値した。きょうも、伊藤さんはお導きに出発する。「会長先生、足りない私にお力をお貸しください」と念じながら――。

「お導きは、だれのためというより、みなへの自分の約束を果たすためのもの」と言う伊藤さんは、きょうも周囲の会員たちに「教会を出発する時には、必ずご本部に向かって、会長先生、きょうも足りない私にお力を貸してください と言って念じるのよ」と優しく諭し、励ますことを忘れない

娘の死を乗り越え真の信仰に目覚める

導きは私の生きがい
願いは地域のサンガづくり

しばらく、夫とは別々に暮らしていました。

私たちは実家暮す。農家の相続問題がこじれて夫が裸一貫のまま家を離れ、関西で紳立する飛鳥を始めたからです。そこで、私と子供たちは、夫の仕事の月島がつくまで、山形の実家に戻っていました。関西からの吉報が待ちかねて、夫が下宿している奈良のお寺を訪ねたこともあります。そして、一人で努力している夫に「我慢しろ」としかられ、泣く泣く戻って来ました。

そんな時だった頃です。学校時代の先輩だった月岡 淑江さん（現・鳥取教会長）が、私の姉を訪ねて来られたのは。

「晴ちゃん帰っていたの。それならいお話を聞ける集まりがあるから、ぜひ出てみなさいよ」

当時、女学校の先生をされていた月岡教会長さんは、村の同窓生のあこがれの〝星〟でした。あの月岡先輩が誘ってくださるからと、姉の代わりに法座へ出させて頂いたのが、入会のきっかけです。幹部さん方から、懇篤の親、実家の親に心配をかけている親不孝を綿々ほう指摘されました。

「ご主人と一緒に生活したいと思ったら、それだけの功徳を積むことよ」

私には、功徳という意味が分かりません。それでも、月岡先輩に導かれるまま、お供参行、導き歩き始めたのです。時間があり、しかも人と話すことが苦にならない私は、お導きが楽しかった。楽しいうえに夫との生活が実現できると教えられ、私はガムシャラにお導きをしてきました。

一歩きました。おかげで、間もなく、私と子供は実家へ移ることができたのです。

考えてみると、あれから十九年。ついこの間、教会長さんから、

「かれこれ一昔前以上になったね」

と言われた記憶さえも、お導き自体が楽しいからとて、させて頂いたのだと感じます。

のこのような心に向ってサンガの皆さんに出会い、本当にほっとしたからです。しかも、そのころの実家には、法座所もない状態でした。幹部の会員さんといえば、刑務所の部長をしている方の奥さんが一人きり。私は、その奥さんを誘って、例の通りのお導き歩きました。正直言って、私はただただ楽しくないやしい打ち明け合える友だちが欲しかったのです。心を一人でも多く、欲しかったからです。

当初は、私と同じ境遇の人を自分に探しました。しかし、そうした人がどこにいるという情報がないのですから、お導きもはかどりません。そこで、近所の方、乗り物で隣り合わせた方など、いわば手当たり次第に話しかけることにしました。

話しているうちに、名前と所を聞き、「お友だちになりたいから、今度、お訪ねするわね」というやり方です。もちろん、訪ねて行っても、全部が全部、いい顔をされません。「二度と来ないで」と言われたところも、数知れません。そこで、お隣へ、「いつもお世話になっております」と、お願いすることが何度か重なって結局、そのお隣さんをお導きし、今ではその方が副主任として活躍されている例もあります。

実のところ、難物はお宅でした。二所を歩き回ってワシの顔に泥を塗る」の一点張り。お導きも、夫が出張したあと、そそくさと用意して出掛けなければなりません。

「あなたが来ないからよ、あなたが変われば、ご主人も変わります」

強情な私は、夫が働いて家族を食べさせるのは当たり前だと思っていました。修行のイロハもできていませんでした。幹部さんに指導を頂き、本当はいやいやながらも修行に入り、眠る時間をさいて家族にソフ奉仕をしない努力をし始めると、夫の態度も変わってきました。そればかりか、夫が始めた鉄工所の事業も、ぐんぐんお得意がつき始めました。

二女を亡くして信仰にぎ折

あれほどから八年間、私は七歳の二女、真理子を失いました。

小学校四年生の時に受けた腸チフスの予防接種が発端で、左上腕部の豆粒ほどのグリアリが、次第にはれ上がり、ついに肉腫と診断されてしまったのです。中学から高校に進んだ真理子は、その肉腫との闘い続けました。私も、「娘の病気を治したいから、ぜひ入会してください」とお願いして、お導きしたケースが何世帯かありますいま数えると、私の気持は三分が仏様であり、七分が真実でした。しかし真理子は、七年間も手足、心臓麻痺のため、苦しむ姿を私たちの前を去って行ったのです。

「お前の信仰も真理子を救うことはできなかった――」

主人が水ツンと言った言葉は、激しく私の胸を突き刺しました。それだけではありません。娘のために、と御願いしてお導きした新しい会員さんも、一人二人と姿を見せなくなりました。

悲しさに加えてもう二つの衝撃を受けた私は、憎悪状態――。幹部さんがご指導に見られても、それを受け入れる余裕がないのです。

私の担当は法座所にお参りに行かないまま、新しい会員さんを送り続けました。

そうこうするうちに、ランプの時代が三年も続いたでしょうか。やがて、奈良教会の設立のため、新しい幹部さんが赴任されてきました。大阪から来られた所静子主任（現・事務長）さん、その一人でした。

私の担当の担当だった所主任さんは、その日のうちに、私の家を訪ねて来られました。そして、いたわりある励ましをかけてくださった後、一言一言押し出すように、こうおっしゃったのです。

「あなたのやり方は、〝信仰体験〟よ、ね」

私は黙っていました。

「お導きをなくしたこと――。そこに、あなた自身が本当に信仰をうかがためのはかばかしいがあるんじゃないでしょうか――」

そして、久所主任さんは、私のしきった奥様のサンゴ、下がる修行が心底からのものであったかどうか、問いただされたのです。言わばムード的に自分の親不幸を感じていた私、いやいやながらの根性を残して修行かと下がっていた私。それがハッキリ意識した時、なぜか私のまなかに真理子の寂しそうな姿が浮かんでくるように、ご主人の姿が浮かんでくるように、伊藤さんの場合は、ご主人が変わるように、伊藤さんの場合は、ご主人が変わるように、伊藤さんの場合は、ご主人が変わ